

マルクスの価値尺度論

中 尾 訓 生

はじめに

マルクスが「対象とした社会」の構造を解明しようとしたとき、まず行った理論的操作は理論対象を二つの側面に分けたことである。現実の人間（商品所有者）の行為を「商品に表示された労働の二重性」としての「抽象的に人間的な労働」と「具体的有用労働」、それから等価形態の第三の特性を示す、「私的労働」と「社会的労働」、これら二組の概念でもって示している。

この二組の概念を基礎に、資本主義以前の社会では分離していた二つの社会性の関連、すなわち物的代謝の領域で結ばれている人間関係と、その社会の歴史的特徴を示す人間関係の関連は後者が前者を規制するというものであったが、「対象とした社会」ではこれらは一体化しており、しかもそれらは現実には「貨幣」に体化していると彼はとらえた。

人は貨幣を現実に諸々の機能から規定したが、彼はこの機能のうちに貨幣の本質が如何に顕現しているかということに注目した。

したがって、彼にあっては諸々の機能——価値の尺度、流通手段、貨幣退蔵、支払手段、世界貨幣、——は無規定に並べられているわけではなく、その順序は「経済学批判」の論理を示している^①。

① 「一般的等価、貨幣は、それ自体のうちに価値の尺度と交換の手段としての内在的な機能規定を包含している。この機能規定は、一方では、価格の尺度標準としての、他方では流通手段としての自己疎外を行うが、ここに国家が媒介者として登場することによって、

1

本稿では「価値の尺度」を上述の視角から解釈する。彼は「経済学批判」の論理を、 $\text{金} \times \text{グラム} = A \text{商品 } a \text{量}$ の背後に $\text{金} = A$ を成立せしめる「或る第三者」の存在を認めるところから展開した。「価値の尺度」を解釈するさいの困難はその点をいかに解釈するかにある。「三章、一節、価値の尺度」の冒頭、彼は次のように述べている。

「私は説明を簡略にするために、この著作では何処でも金が貨幣商品であると前提する。金の第一の機能は、商品世界にたいしてその価値表現の材料を供し、または商品価値を同分母をもつ大いさ、すなわち質的に等一で、量的に比較のできる大いさとして表示することにある。こうして、金は価値の一般的尺度として機能し、この機能によってはじめて金という特殊な等価商品が、まず貨幣となる。諸商品は貨幣によって通約しうべきものとなるのではない。逆だ。すべての商品は、価値として対象化された人間労働であり、したがって、それ自体として通約しうるものであるから、その価値を同一の特殊な商品で、共通に測り、このことによってこの商品を、その共通の価値尺度、または貨幣に転化しうるのである。価値尺度としての貨幣は、商品の内在的な価値尺度である労働時間の必然的な現象形態である。」(『資本論』・I. 向坂訳・123頁)

一方は法制的な本位として、他方は鑄貨としての形態的転成を遂げるのである。しかもかかる二つの基本的機能形態はそれらを派生せしめたその本来的な一般的等価の統一性に基づいて、再びまたその両機能の統一として新たな機能を獲得する。これすなわち、「価値尺度と流通手段との統一」としての「貨幣」の機能である。世界貨幣はまさにこの貨幣の「貨幣」としての機能の究極的総括者にほかならない。世界貨幣はその内面的自己限定においては、一般的支払手段、一般的購買手段、富一般の絶対的社会的体化物である。しかしそれらは、先原初的の二機能と、その統一としての貨幣の蓄蔵、支払手段の両機能との普遍的展開にほかならず、まさに世界貨幣においてこれらすべての限定的機能は総括止揚されるものとなる。」(『恐慌論体系序説』高木幸二郎、83頁)

本稿は、「価値」にたいする解釈を基礎に価値の尺度を「流通」に関連させて位置づけた。

ここで述べられていることは、

(1) 対象化された人間労働 = A 商品,

〃 = B 〃

〃 = C 〃

であるから、

(2) 金 X グラム = A 商品 a 量

金 Y グラム = B 商品 b 量

金 Z グラム = C 商品 c 量, ということである。

(1), から(2), への展開は「一章」「二章」の課題であった。(2), での「貨幣 = 金」が、価値の尺度である。この場合「商品価値は各種の大きさの観念上の金量に転化」されており、「貨幣はその価値尺度の機能においてはただ観念となった貨幣, または理念的の貨幣としてのみ用いられる」のである。

われわれが現実にとらえることのできる形態は、価格形態(3)である。

1 グラム = 1 円と定めると, $x \text{ 円} = A \cdot a$

$y \text{ 円} = B \cdot b$

$z \text{ 円} = C \cdot c$

そこで以下、解釈していくことは、(1), (2)と(3)の関連である。

久留間氏は「価値の尺度」を解釈するにあたって二つの過程を区別する必要があるとされる。それは、上述の(1)と(2)である。次のように述べておられる。

「(1), 金が商品世界の共同行為によって一般等価物にされる過程, このかぎりでは金は何らの機能もしていない。……………」

…………… (2), すでに貨幣になっている金でいちいちの商品が自分の価値をあらわす過程, ……………」(久留間鮫造, 「マルクスの価値尺度論 I」『思想』42 頁 1963 年, 12 月号, 番号引用者) 氏は, (2)を貨幣 = 金の価値尺度機能だとされる。それでは, (1), (2)が区別されている意味を氏はどのように解釈されているか。(2)については, 「貨幣としての金への商品の転化は販売によってはじめて実現されるわけですが, この実現は当然, 商品の価値があらかじめ

観念的に金に転化されていること、すなわち、価値が価格に転化されていることを前提するのであってこの転化にさいしての金の役割をマルクスは金の価値尺度機能であるとしている」(45頁)と述べているのであるが、これでは、金の価値尺度機能は明確にならない。現実には貨幣になっている金をわれわれが手にするときは、商品には値段表がはられているのであって、具体的に(2)の過程(価値の価格への転化といわれている事)がどのようなものであるのか、氏の説明からは理解することが困難である②。

明らかにされるべきは、(2)の過程が現実社会において、どのように表現されるのか、ということである。

(1)の過程は、「物神性」を措定するものであった。「物神性」は現実社会でどのように表現されているのであろうか。

価格形態についてマルクスは次のように述べている。

「価格形態は価値の大いさと価格との、すなわち価値の大いさとそれ自身の貨幣表現との間の量的不一致の可能性をもたらすのみならず一つの質的矛盾を生ぜしめうるのである。……………それ自体としてはなんら商品でない物、例えば良心、名誉等々もその所有者は貨幣にたいして売ることができるし、

② 久留間氏は②、価値の価格への転化についてさらに次のように述べられている。

「商品の価値の価格としての表示のさいに演じる金の役割に関して……………考察されねばならぬ質的規定の問題がある。……………価値が金の姿で表示され価格の形態をとるということ、このことは、いったい商品生産にとってどのような意味」をもつのであろうか。「商品生産は直接的社会的な生産ではない。商品を生産する労働は当初から社会的な労働ではなく直接には私的な労働です。そういうものから社会的生産の体制が生じるためには商品生産者の私的な労働は何らかの契機において何らかの形態において社会的労働にならねばならぬ。ではどのような形態で商品生産者の労働は社会的労働になるかという、けっきょく金の姿ではじめてそういうものになる。」(マルクスの価値尺度論Ⅰ)45頁)『思想』1963.12月号上述の説明はマルクスの貨幣把握のための研究過程の一文脈を形成している。

例えば、プルドン主義者の時間紙券論批判は、彼らが暗黙のうちに商品生産の下で人民銀行による経済管理を想定していることを明らかにした。マルクスはこの文脈から、「私的労働」と「社会的労働」でもって貨幣の必然性を説明しようとした。これは、『経済学批判』(1859年)でみられる。しかし、この説明は『資本論』では採用されていない。

かくてまたこれらのものがその価格によって商品形態をうることができる」
 (『資本論』 I 134 頁)

価格形態は二つのことを内包している。

$$(I) \quad A \cdot a(x) \text{ --- } x$$

$A \cdot a(x)$ は x として実現されるかどうかわからない。むしろこの形態のもとでは $x \pm a$ として実現されるのが常態である。それは価格形態の欠陥ではなくして「逆にこれを一生産様式によく当てはまる形態にするのである。この生産様式(私有財産に基づく分業)では規律はもっぱら無視律性の盲目的に作用する平均法則として貫かれうるのである」(同上, 133 頁, 括弧内は引用者)

(II) 質的なもの(人と人との関係, ここでは, 商品所有者の関係)が量的に表現され得るということ。

そして (I) と (II), はともに「流通」, $W-G-W$ によって維持, 拡大される。

したがって, (1), (2) と (3) の関連は「流通」を解釈することによって明らかとなるであろう。(1), (2) での本質規定が現実, (3) にどのように顕現するか, ということである。

「流通」の解釈の入る前に注意しておかなければならないことがある。

(I) で述べられた「生産様式」(私有財産に基づく分業)は (II) で述べられた「物神性」と同じ方法では概念化されていないということである。「一章」, 「二章」, で概念化されたことは (II) で述べられた「人と人との関係」である。

「生産様式」はマルクスが観察した社会経済事実から得られたのであり, 「生産様式」は, 「人と人との関係」が顕現する場(量の世界)としての位置をあたえられている。

したがって, 彼が何故, 内在的な尺度としての貨幣(労働貨幣)を現実に入れわれは手にすることができないのかと問題を出し, この解答は「私的労働」と「社会的労働」の関連を追求することによってあたえられるだろうと

しているのは一面的である^③。

なぜなら「私的労働」と「社会的労働」はこの生産様式の下での物的代謝過程で貨幣が果している役割から得られたものであるから、それによっては貨幣の発生は説くことはできない。

2

「流通」,において示されていることは「一方において……商品交換が直接的な生産物交換のもつ個人的,地方的な限界をどうして突き破り,人間労働の物質代謝を發展させるかということであり,他方において行動する各個人の手ではどうもしがたい社会的な自然関連の大きな範囲が發展してくる」(同上,147頁)ということである。ここには,(I)と(II)に関連することが説かれている。それは並例的に説かれているが,具体的には,(I)(II)は一つの行為,あるいは一つの事実のうちに顕現する。

さて,W—GとG—Wの分離,拡大は一定の点まで達すると強力的に統一させられる。

恐慌である。恐慌は流通形態の内に保持されている矛盾——「商品に内在している対立,使用価値と価値,同時に直接的に社会的なる労働を表わさなければならぬ私的労働,同時にただ抽象的に一般的な労働となされる特別な具体的労働,物の人格化と人の物化」(同上,148頁)——の現実化である。

③ 「なぜ貨幣が直接に労働時間そのものを代表しないか,したがって,例えば一紙幣がx労働時間を表わすというようにならぬのかという問題は,きわめて簡単に,なぜ商品生産の基礎の上においては,労働生産物が商品として表示されねばならぬのか,という問題に帰着するのである。……なぜ私的労働は直接に社会的労働として,すなわちその反対物として,取り扱われることができないかの問題に帰着するのである」(『資本論』I 123頁)

上述の引用文は〔註〕なので,したがってマルクスの理論形成を示すものと解するならば,本稿の本文でのように「……一面的である」とすることもない。ただ,ここで僕が注意していることは,「或る人間の事実の發生的研究は常に且つ同程度に,その事実の物質的な歴史とそれに関する理論の歴史とを含んでいる。」「学説は,社会的事実そのものの不

恐慌とは、W—G—Wの連続性の突然の切断である。それは物的代謝の混乱であるが、次のことも注目しなければならない。

W—G—Wの連続性が維持されているときと、切断されているときの「物神性」の顕現形態の相違である。

そこで、まず恐慌と「物神性」の関連について考察をすすめることにする。「経済学批判」体系の最終項目は「世界市場と恐慌」である。この項目について、彼は次のように述べている。「世界市場の篇では、生産は全体として措定され、またその諸条件のいずれもが同様に措定されている。……………そのさい恐慌は前提をのりこえる一般的な指示であり、新しい歴史的形態の受入れを迫る圧迫である」（『経済学批判要綱』146頁、高木訳）

「物神性」が「対象とした社会」の歴史的特徴づけであることを想起すれば、ここで、恐慌は「物神性」の深まりゆく限界——プロレタリアートによる新しき関係の創出——として位置づけられていることがわかる。もちろん、それは、ブルジョア的生産様式の混乱という場で顕現するのである。ルカーチは恐慌については次のように述べている。「恐慌はいずれも資本主義の法則的な発展における死点を意味するのであるが、このような死点が資本主義的生産の必然的な契機であることがわかるのは、プロレタリアートの見地からだけである。……………資本主義的生産秩序の最大の生産力であるプロレタリアートが、恐慌をたんなる客体として体験するか、それとも決定の主体として体験するか、という点に決定的な比重がおかれねばならないことは明らかだからである」（『歴史と階級意識』401頁、古田訳）

しかし、ルカーチのこの恐慌の位置づけにたいして注意しなければならないことは、マルクスの論理展開では恐慌は社会経済的事実として観察された

可欠な部分をなすもので、一時的な抽象によってのみ分離することができるものである。或る時代の精神生活を理解するという時に、社会的歴史的現実が最も重要な要素の一つであるのと同じく学説の研究は問題の実際的研究の不可欠な一要素なのである。」（『人間の科学と哲学』L・ゴールドマン、63頁、川俣訳）とゴールドマンが述べているように、マルクスの理論形成は二つの研究対象があったということである。この点については「価値形態論の形成」「価値形態論の構造」（『山口大学経済学雑誌』22巻5・6号、23巻1・2号）で指摘しておいた。

ものであり——したがってその具体的形態が重要なのであるが——そこに概念化されたプロレタリアートが「物神性」を論証するものとして措定されているということである。プロレタリアートが恐慌のたんなる客体であることをやめる条件、主体的になり得る状況というのはマルクスが観察した事実なのである。

亜麻布 20 エレ = 上衣 1 着の交換比率の決定機構を明らかにする論理、すなわち生産価格論と亜麻布 = 上衣とした論理はこのように最終的には恐慌によって結びつけられている④。

さて、W—G—Wの連続性の切断がどこから生じるかは流通の次元では看取できない。

ここでは、貨幣の諸規定が流通との関連において説かれていることに注目すべきである。(1)、(2)との関連を抜きにして(3)、価格形態にのみ着目するならば、人はまず貨幣を計算貨幣として規定する。この規定は諸商品は貨幣によって通約されており、そして貨幣とは「ひとしい部分からなっている勝手にさだめられた度量標準で売ることのできるものの相対価値をはかるために発明されたものにほかならず、……………たとえすべての商品にたいして比例的等価物であるような実体がこの世になくても実在しうるのである」(『経済学批判』大内訳、96頁)という観念と照応している。

W—G—Wの連続性が保持されている限り、Gは瞬過的に存在するだけでこの観念は再生産される。経済過程の主人公は自由にこの過程を操作できるものと確信する。彼らは売るために買うという行為に専念し、それを天職であると感じ、そこから自らを社会に位置づけようとする。社会関係を形成する。

しかし、W—G—Wの連続性が切断されると「貨幣は突然に、かつ媒介なしに計算貨幣という観念的にのみ存した態容から硬貨に転換する。

④ 「三章、一節」の段階では、もちろんプロレタリアートは説かれていない。商品所有者の関係が説かれているだけである。ただ、この「物神性」のもとでのみ搾取が日常的に遂行され得るとマルクスがしていることは解釈されるであろう。

……………鹿が新鮮な水辺をしたい鳴くように世界市場の心は、唯一の富である貨幣をもとめ叫ぶ」(『資本論』I 178 頁向坂訳), ということになる。彼らは、いままで無意識的に安住していた社会関係の崩壊によってキラキラ光る金が社会関係(権威)の体化物であることを感得させられる。

価格形態(3)に内包されていた矛盾はW—G—Wの切断を引き起し、顕現する。

価値尺度論においては「対象とした社会」の歴史的特徴、「物神性」が現実においてどのように顕現するかという「経済学批判」の課題が措定されるのである。そして「物神性」の維持、拡大はW—G—W私有財産に基づく分業の下での物的代謝の維持、拡大として展開されていくのである。「経済学批判」は理論対象として二つの側面をもつ。一方は「物神性」であり、他方は私有財産に基づく分業の下での物的代謝の機構である。マルクスによる古典派経済学批判は巧みにこの二側面からなされている。リカードが不変の価値尺度の探求で意図していたことはスラッフアが明らかにしているように生産物の分割の変化の影響をうけない価値の尺度の発見であった。(『リカード全集』I 編者序文)

リカードの視点から、すなわち利潤率の決定ということから、これをマルクスの領域に位置づけるならば、生産価格論の問題となる。しかし、マルクスはリカードが不変の価値尺度の探求において見落したことは、労働=亜麻布=上衣を成立せしめるのは、いかなる形態のもとであるのか、ということへの考察であったとしている。(『剰余価値学説史』III マル・エン全集 177 頁)そして、リカードが本来的に意図していたことは、「諸商品の交換を規制する事情の決定」として批判され、生産価格論としてとりこまれている。

3

高須賀氏は独占段階における経済理論は「可能性の論理」で説明すべきであると述べられているが氏が提起された問題は「経済学批判」の解釈に一つの視点をあたえるものである。氏の論点を検討しながら、さらに本稿の課題をすすめていくことにする。

氏の「価値尺度機能麻痺論」の要石は独占資本は生産性が上昇しても価格

を硬直的に維持することができるというところにある。これは、また総価格の総価値からの乗離が自動的、無政府的には調整されなくなったということである。いわゆる、恐慌の形態変化である。

独占資本による操業度の調整、市場への介入、管理通貨制による人為的有効需要の創出、等々と、資本の意識的行動は経済過程に反映される。産業資本主義段階では、資本家は市場からの指令には服従しなげらなかつた。彼らの行動は極大利潤率を求め——例えば生産性を上昇させて価格を切り下げる。労働時間の延長、強化による実質賃金の切り下げ。——行動に限定されていた。

総価格の総価値からの乗離は恐慌によって暴力的に統一された。

産業資本主義段階の「必然性の論理」にたいして「可能性の論理」が意味するところは、「経済学批判」の最終項目は、もはや「恐慌」ではないということである。

氏は「価値尺度機能麻痺論」を提起したことについて明快に次のように述べておられる。——1929年恐慌のような大恐慌の出現を予想して、それによって総価値と総価格の乗離は、自動的に調整され、それによって独占資本主義においても価値法則は貫徹するという価値法則の理解と決別するためであった。（「価値尺度機能の麻痺の意味するものは何か」『経済理論学会年報、11集』181頁）——かつては、総価値と総価格の統一は諸資本家の貨幣=金を求める行動を通して達成されたのであるが、氏の想定は出発点においてW—G—Wの切断は否定され、維持されるものとなっているのであるから、貨幣=金の果す役割は産業資本主義段階とは異っている。

独占資本はW—G—Wを維持しながら、なおかつ資本の価値破壊を行うものと想定される。このことの解明が「価値尺度機能の麻痺」の内容であると氏は述べられている。

しかし、これでは貨幣=金は観念的存在であっていいので、まさに計算貨幣としての規定があたえられることになる。外在的尺度としての貨幣=金の役割は消失することになってしまう。そこで氏は結論として次のように主張

される。「独占段階において自動的に調整不可能な総価格の総価値からの乗離が進み、その限りでは資本主義の根本特色の一つであるといつてよい自動調節メカニズムにひびが入ったわけでありましたが、何らかの自動調節メカニズムなしには資本主義が存立しえないということでもあります。わたくしの考えでは最後のそれゆえに、不可欠の自動的レギュレーターが世界貨幣としての金であります。」この世界貨幣としての金は氏の可能性の論理から導出されたものではないということに注意しなければならない。すなわち、氏は続いて「というのは、国内における自動調節機構の麻痺とそれのもたらす矛盾が、いまや国際通貨制度の危機に転嫁され、これをどのような形で正常化するかが国際経済の最大課題の一つとなっていますが、国際通貨制度をめぐる帝国主義諸国間の経済的利害の対立が完全に止揚されないかぎり、最後は世界貨幣としての金による自動調整にたよらざるをえなくなるだろうと思われまゝ。そこに現代資本主義にとっての『死重』としての金の意義があるのであり、それがまた資本主義にとっての最後の自動調節メカニズムの礎石でもあります。」(同上, 179頁)世界貨幣としての金は以上のような位置づけをあたえられるのであるが、1929年型の恐慌が否定されているということは、諸資本家の協調によるW-G-Wの維持ということの内に「帝国主義諸国間の経済的利害の対立」は含まれていたのではなかったのか。

- ⑤ 「貨幣は商品の価値を表現し(質的方面)ならびに商品の価値量の大小を測定する(量的方面)とき価値尺度の機能を発揮する。」というマルクスの説明から、氏は価値尺度を動的に把握しようとする。

「価値方程式を所与とし、そのうえで外在的尺度としての貨幣の機能を明らかにするだけでなく、逆に外在的尺度としての貨幣の機能の発動によって価値方程式=内在的尺度を措定する根拠を明らかにしないと本来相互なるものとして理解すべき内在的尺度と外在的尺度との関連が一面的に理解されることになるであろう。」(『現代価格体系論序説』、高須賀義博, 101頁)

質的方面と量的方面の関連を生産価格体系の下で次のように説明する。

景気の上昇過程では現実の価格総額が上昇する。貨幣の流通速度のを一定と仮定するとWを実現するGは金の供給量に依存する。

しかし、価格標準の変更がないかぎり、産金業者は一般の価格総額が上昇しているの一般的な利潤率が得られないので供給量を制限する。だから金供給の大きさによって現実

氏は世界貨幣としての金によって総価値と総価格の乖離が自動的に調節される事態を予測されるのであるが、この論理根拠は明確にされていない。

そこで氏の「価値尺度」にたいする解釈を検討することにする。

氏は、「価値尺度」論の理解は外在的尺度（＝貨幣＝金）と内在的尺度（＝労働時間）の関連を明らかにすることによってはたされるといわれる。

具体的には貨幣＝金の発動によって等労働量の交換、生産価格の下では一般的利潤率を措定することが金の価値尺度機能であるとされる。ここに外在的尺度と内在的尺度の関連を氏はみている^⑤。購買手段としての貨幣＝金に価値尺度の質的規定を、氏は認めておられる。

の価格総額は制約される。 図で示すと、

流通速度 α は一定、

(現実の価格総額) $W \uparrow - G \cdot \alpha - W$

産金業者の資本循環は、 $G - W \uparrow \cdots P \cdots W$ (価格標準一定) —— $G + \Delta G \downarrow$

氏によれば、まさに金の積極的な機能によって景気の上昇過程は反転することになる。しかし、これは貨幣の流速度 α を一定とする非現実的な仮定によっている。(105～119頁)

それでは、独占段階での「価値尺度機能麻痺論」はどのように説明されているのだろうか。独占グループと非独占グループを設定し独占グループ内において、ある企業が新生産条件を導入して超過利潤を獲得しているとする。しかし、その生産条件が独占グループ内に一般化すると通常は価格が低下して超過利潤は消滅するのであるが、このグループは価格を下げないので超過利潤は消滅しない。

すると労賃の高位平準化作用によって非独占グループの賃金が増加するのでこのグループの価格は上昇せざるを得ない。それは何故か。「独占資本主義の下での競争産業は従来資本制約的生産を続けてゆくうえで最小限度必要とみなされる利潤率水準におし下げられていると考えられるので利潤率の従来水準以下への低下はその産業での生産を続けるか、否かということと関係してくる。そして、その産業体制の一環に組み込まれており一定量の産出量の供給が社会にとって必要であるとすれば、その供給量を確保できるだけの資本を吸引するにたる利潤率の回復はどうしても必要であり、かつ総資本は容認せざるを得ない。」(214頁) だから非独占グループの価格は上昇するとされる。(この非独占グループの利潤率の回復にたいする説明は説得的であるとは思えない)

このように「独占資本主義の下では実現さるべき価格総額は貨幣用金の供給に依存せず、独占資本の確立にともなって生産構造の内部に深くビルト・インされた価格上昇機

本稿では、価値尺度の質的規定（＝物神性）は具体的にはW—G—Wに規定された商品所有者の行動に顕現すると解釈している。

したがって、独占段階における「価値尺度機能の麻痺」の意味するところは諸資本家が協調してW—G—Wの維持を図るところにある。マルクスの論理に立脚してさらに解釈をすすめていく場合、解明されるべきことは、「経済学批判」の最終項目のうちに暗示されていた、すなわち具体的事実としての恐慌形態によって一面的に規定されていたプロレタリアートの「経済学批判」における位置。プロレタリアートは「物神性」の対象を構成する一要素でありながら、なおプロレタリアートが「物神性」を打破し得る根拠とその行動形態^⑥。

そして諸資本家の協調ということから当然、「ブルジョア意識」の限界性の構によって上昇し逆に実現されるべき価格総額に対応するように度量標準の変更や金生産量の増加を要請するにいたっている。」（ ）

産業資本主義では金の外圧的尺度機能によって経済過程は規制されたが、いまや金の価値尺度機能は麻痺してしまったというのである。しかし、氏は「麻痺ということの含意は価値尺度機能の正常態からの一時的な逸脱であって、それは必ず回復させられねばならぬということである。」（「経済研究」20巻3号250頁）と述べている。この説明は氏の可能性の論理から引き出されたというよりも現実に貨幣＝金は存在しているという事実から引き出されているようである。以上の展開から、しかしながら氏は次のことは確認されていると思う。W—G—Wの連続性の突然の切断による暴力的な価値と価格の一致という回復の形態は否定されているということ。本稿が関心をよせているのは、これ以外の回復の形態はどのようなものであるのか、ということである。

- ⑥ L・ゴールドマンは次のように述べている。「物化された思考というものは一つの社会的現実でして実にいろいろさまざまな筋道によって労働者の思考にも働きかけてくるわけですから、その影響力には大きなものがあります。けれども、それは社会学的現象であって経済的現象ではないし、外在的影響力であっても自発的物化ではありません。なぜかといえば、労働者は「物化」によってなにも得をすることはないからです。……労働者というものは、およそ人間がそのもっとも直接的な利益を守るためにも団結し合わなければならない……唯一の社会的カテゴリーに属しているということです。」（『人間科学の弁証法』128頁川俣訳, LUCIEN GOLDMAN 「RECHERCHES DIALECTIQUES」）本稿では「経済学批判」の基礎概念がプロレタリアートであることを指摘するだけでよい。基礎概念とは、「経済学批判」を論証する概念ということである。マルクスは「5章、労働過程と価値増殖過程」で人間（プロレタリアート）の基本

検討。提起されている問題は極めて大きいものであるがマルクスの解釈者にとっては避けることのできない重要な問題である。

前述したように、マルクスの論理では「物神性」の歴史的射程は「物神性」が顕現する場であるW—G—Wが10年毎にその連続性を突然に切断されるという社会経済的事実によって規制されていた。^⑦

4

宇野弘蔵氏の「価値尺度」の解釈にたいする疑問点は以下の如くである。氏にあっては価値を尺度するということは、商品所有者の私的な主観的評価でなく、「新しい価値関係に適応した価格を形成」するということである。そして、それは繰り返される購買によって形成される。「繰り返される」ということの意味は貨幣に直接交換可能性があるということを明確ならしめるところにある。

したがって貨幣の価値尺度としての機能は貨幣が積極的に購買手段として役立ちつつ商品の価値を客観的に尺度するところにある。

氏の「価値尺度」論は二つの論点によって構成されている。

(1)、貨幣に直接交換可能性があるということ。

(2)、現実の貨幣＝金によって、商品の価値を客観的に尺度するということ。

的行為を二重性において——すなわち、「物神性」を打破する可能性を秘めた行為として、また「物神性」を形成している行為として——とらえている。この点についての検討は、後の機会にゆずることにする。プロレタリアートの概念そのものが普遍性をもっているかどうか検証することはマルクスの論理を創造的に発展させるうえに不可欠である。

⑦ 本稿が指摘してきた理論構造は、「貨幣の資本への転化」の展開にも当然みられる。

マルクスは、比喩的に本源的蓄積が「貨幣の資本への転化」のさいに演ずる論理的役割を原罪が神学で演ずるそれと同じようなものであると述べている。

すなわち、「貨幣の資本への転化」の論理的悪循環を断つためには「資本主義生産様式の結果ではなく、その出発点である蓄積を想定するほかない」ということであるが(『資本論』I, 向坂訳, 894頁)この場合、社会経済的事実としての本源的蓄積が「物神性」(対象とした社会の歴史的特徴)論の展開のなかに必須の要素として入ってくることになるがこれは、次元の異なる二つの理論対象が与えられたことになる。

本稿ではこの二つの理論対象がどのように関連しているのであろうか、ということを中心に展開している。

(1)の規定だけならば貨幣=金は観念的の、または理念的の金であってよいので現実の金は一片も必要とはされない。

しかし、氏の場合、この規定は貨幣=金が現実的に購買手段として発動するということと結びついている。

そこで次の疑問が生じる。商品の買手はいかにして、この貨幣を手に入れることができたのか、ということである。

この疑問に氏は「金貨幣はすでに単なる金商品ではない。その点では商品価値の実現されたものとして貨幣所有者の手に入ったものとしてよい。」(53頁)と述べている。

氏は、 $G-W_b$ のGは W_a-G であるとされている。したがって商品の買手が手に入れた貨幣というのは、流通 W_a-G-W_b が前提されて説かれるということになる。換言すると購買手段としての貨幣を説くためには流通が措定されていなければならない。

氏は $W-G-W$ として商品の変態を考察すると商品は自ら運動することになり、貨幣によって運動させられるということが閑却されると、強調されるのであるが、「価値の尺度」の規定が内包する(1)の規定でそれはみたまされているのではないだろうか。

(2)の規定は氏自身も指摘しておられるように、それは結局、生産過程によって遂行されるのであって、したがって(2)に立脚するならば高須賀氏のように結局は、生産価格論の形成メカニズムとして、しかもそれは、貨幣=金が不可欠の役割をはたすものとして説明されなければならないであろう。この場合、高須賀氏の展開にたいする僕の疑問は景気の上昇過程を貨幣=金の制約によって反転させているということであった。® (『原理論の研究』所収の「マルクスの価値尺度論」宇野弘蔵)

® 高須賀氏の価値尺度論にたいして宇野氏の解釈に立脚して桜井毅氏が反論されているが、それは宇野氏の経済学方法論の繰返しであって宇野氏の価値尺度論を積極的に展開したものではない。 「価値尺度の機能」 (武蔵大学論集)